

今、中国の名が出たので少しだけふれておくと、古代の中国の神話では、太陽の中には三本足のカラスが住むとされ、神聖視された。「三本足」を八咫鳥と関連づけて記憶している人も多いが、『古事記』などに綴られた八咫鳥に三本足の記述はない。日本サッカー協会のエンブレムなどで八咫鳥が三本足に描かれるのは、古代中国の神話の影響である。

~~~~~

咫(シ) →八咫鳥 →やしからす→香具師からす

~~~~~

ハシボソガラス ガーガー、ガアァガアァ、などと濁った声で鳴く。自動車にクルミを割らせたり、高いところから岩に貝を落として割って食べているのはこちらのカラス。

ハシブトガラス カーカーと澄んだ声で鳴く。地上を歩く際は、両足そろえてピョンピョンと跳ぶ「ホッピング」をよく見かける。

さらに都会には、ハヤブサの獲物となるハトなどの鳥が無数にいた。日々の食料として、また雛に与える食べ物として必要な数だけ捕獲しても、ほとんど減ったりしない。つまり都会は、食べ物の宝庫でもあった。

ハヤブサは急降下して獲物を捕らえるタイプの狩りをする。そのためには途中で障害物がないことが条件となる。高いビルだけが林立する都会は、そうした狩りにも絶好だった。

こうしたことから、東京や札幌といった日本の都市のみならず、アメリカやヨーロッパの都市においても、ハヤブサの定着が見られるようになっている。今後は、都会で生まれて育った、山を知らないハヤブサも増えていくことだろう。都市が続くかぎり、都市でのハヤブサの生活は続いていくにちがいない。

...

ハヤブサは上空から獲物を探し、急降下して襲うといったタイプの狩りをする。自由落下する体にさらに羽ばたきを加えることで、降下速度は状況によっては**時速 300 キロメートル**を超える。

鳥の名称にはいくつか決まったパターンがあって、末尾につける「め」が小鳥をあらわす接尾語であることはよく知られている。スズメの「メ」がそうであり、ヤマガラスの古名である「やまがらめ」も同様とされる。

春、ツバメは東南アジアの島々や北部オーストラリアから日本に渡ってくる。**移動距離はおよそ四千キロメートル**。わずか17~18グラムの鳥が、自身の翼でそれだけの距離を飛び越えてくることに驚く。スズメでさえ25グラムの体重があることを考えれば、どれだけ軽いかわかるというもの。

渡り鳥は、渡りをしていかにあいだ極端に睡眠時間が減るという研究報告がある。それでも、眠りがゼロでは死んでしまうので、必ず途中で眠ることになる。

ツバメは海鳥ではないので、海において、波に揺られながら眠ることができない。またツバメは、カモやツグミなどの冬鳥とちがって、群れをつくらず、それぞれが**単独で日本へと飛来**する。眠っているあいだ、敵を見張ってくれるような仲間もないため、ツバメもほかの渡り鳥と同様に、ときどき**短く眠りながら飛んでいる**と考えられている。

鳥にはそれぞれ、「安心できる距離」というものがある。多くの小鳥類は群れをつくって暮らしているが、群れをつくる鳥でも、同種のほかの鳥が一定以上の距離に近づくことを忌避する傾向がある。2羽が同じ枝にとまったとしても、一定の距離を空けるのがふつうで、種がそれぞれにもつ「安心できる距離」を超えて近づきすぎると、居心地が悪くなって、どちらかがそこから飛び去ってしまう。

ところがメジロはその距離がきわめて短い。翼が触れあうほどの距離も、嫌な顔ひとつせずに許してしまう。あまり長くない枝に何羽ものメジロがくっつきあってとまっている姿を見ることも珍しくない。それがもととなって、「**目白押し**」という言葉が生まれたほどだ。特に冬場は、くっついた方が体温が逃げずに温かいことをメジロも知っている。

ホトトギスがよく鳴くのは夕方から早朝で、暗闇の中を飛行しながら、「キョッキョン・キョッキョッキョ」 と高らかに声を響かせる。その声は人々にさまざまに聞かれ（「聞きなし」という）、「チッペン・カケタカ」とか「ホッチョン（包丁）・かけたか？」などと聞き取られたほか、近年では、「トッキョ・キョカキョク（特許、許可局）」などと聞こえてしまった例もあった。

ホトトギスは里にもやってきて、民家の近くでも鳴く。**ウグイスが定着している場所なら、托卵する相手を探してホトトギスも来る**。大都市周辺でも、その声を聞くことがある。

一方、カッコウは民家の近くにはあまり寄りつかず、人里から少し離れた山の林から深山にいて、静寂な環境の中、よく響く声で「カッコウ」と鳴く。

ちなみに「**閑古鳥が鳴く**」の閑古鳥はカッコウのこと。閑古鳥と書くと、なんとなく、物寂しさも感じてしまうが、そんな環境にカッコウは生息している。このように、生活圏が人々の生活と離れていたことが、カッコウの認知が遅れた理由のひとつと考えられる。

そんなフクロウ科の鳥たちには、「飛ぶときに音を立てない」という特徴がある。飛翔する力を生む翼の「風切羽」の先端にギザギザがあって、羽ばたきの音をきれいに消してしまふからだ。そのため、深夜に眠っているところを襲われた鳥や動物は、鋭い爪が自身の身に突き刺さる直前まで、フクロウが近づいたことに気がつかない。

・・・

なお、静音、無音で飛ぶフクロウ類の風切羽の構造を参考に、時速 300 キロメートルで走行しても騒音がでない新幹線のパンタグラフが開発され、実用化されたのは、現代の逸話である。

しかし、夜は無敵のフクロウ類も、昼は手のひらを返したような弱者になってしまう。たとえば、ミミズクを籠に入れたり、紐でつないだ状態で林に置くと、シジュウカラのような小さな鳥たちが多数やってきて、集団でそこから追い払おうとする。ミミズクが昼間は反撃してこないことをちゃんと知っているので、大声を出しながら執拗に攻撃を繰り返す。その姿には、「夜の仇を今こそ取る！」という気迫がこもっているようにも見える。このような鳥の追い払い行動は「モビング（擬攻撃）」と呼ばれる。

フクロウの仲間の中でも、フクロウやメンフクロウの顔は特に平たい。それは顔自体が音を集める集音装置になっているためだ。パラボラアンテナが電波を集めるように、彼らは顔で音を受け止めることで、拡大された音を両耳に届けることができる。すべては暗闇の中で、音源の位置やその移動を正確に知るためのフクロウ類独自の進化だった

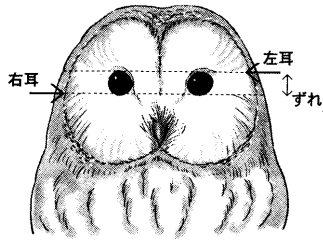
・・・

人間をはじめとする動物の耳は顔の左右の分かれた位置にあって、それぞれの耳で音を捉えることができる。離れた場所から発せられた音は、数万分の1秒というごく短い時間差で左右の耳に届く。脳はそのズレを分析して、左右のどの方向、どのあたりから聞こえてきた音なのか知ることができる。

ただ、それは水平方向に限ったことで、上下の角度がある高い位置からきた音は、水平方向の音よりも把握できる精度が落ちる。だがフクロウ類は、暗闇の中を飛びながら、相手の居場所や移動する方向、移動する速さを三次元の情報として正確に知る必要があった。

そこで彼らを選んだのが、耳の高さを左右で変える、という進化だった。そうすることで、同じ高さに両耳がある

時よりもずっと高い精度で、垂直方向の音も把握できるようになった。この能力を得たことで、フクロウやメンフクロウは完全な暗闇の中でも、目で見えるように脳の中に地図を描き、音源めがけて正確に飛んでいくことができる。



左右の耳の高さがちがうことで、フクロウ類は垂直方向についても、音源の位置を水平方向と同じレベルまで正確に把握することができる。